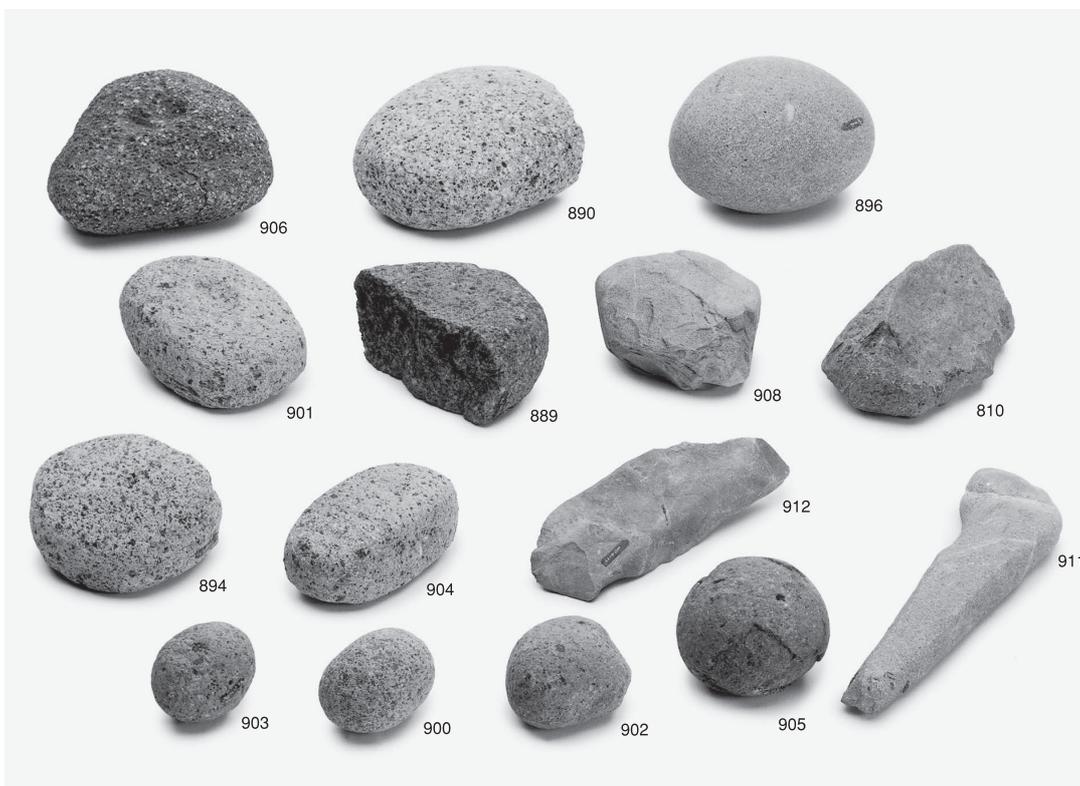


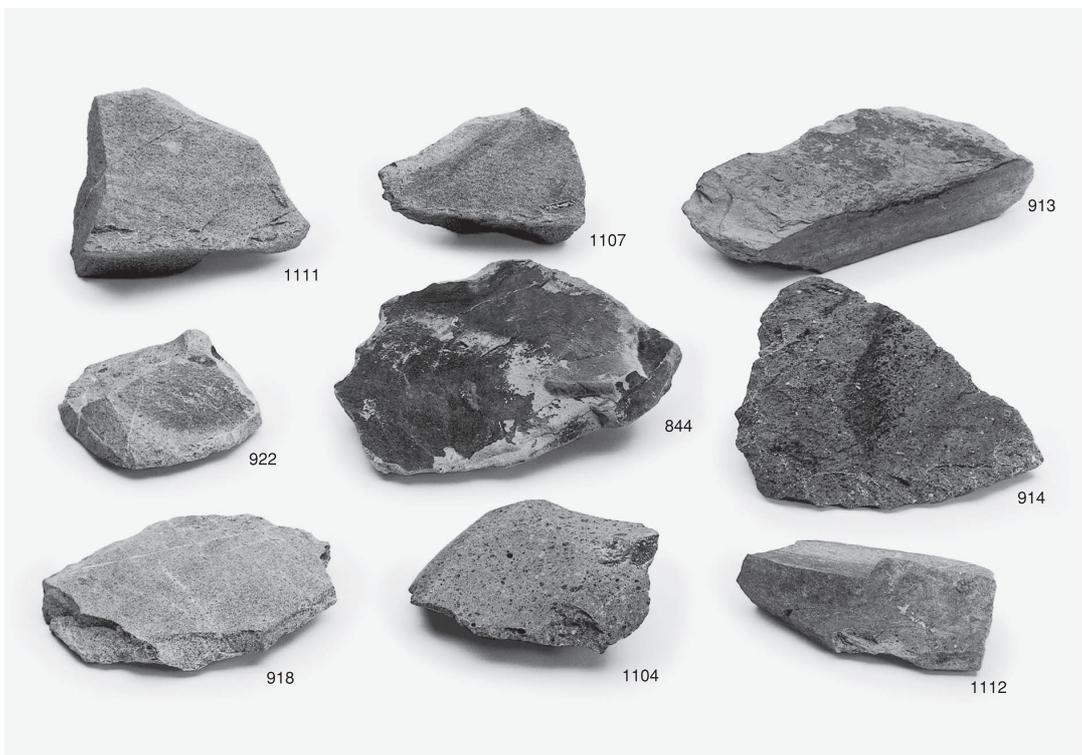
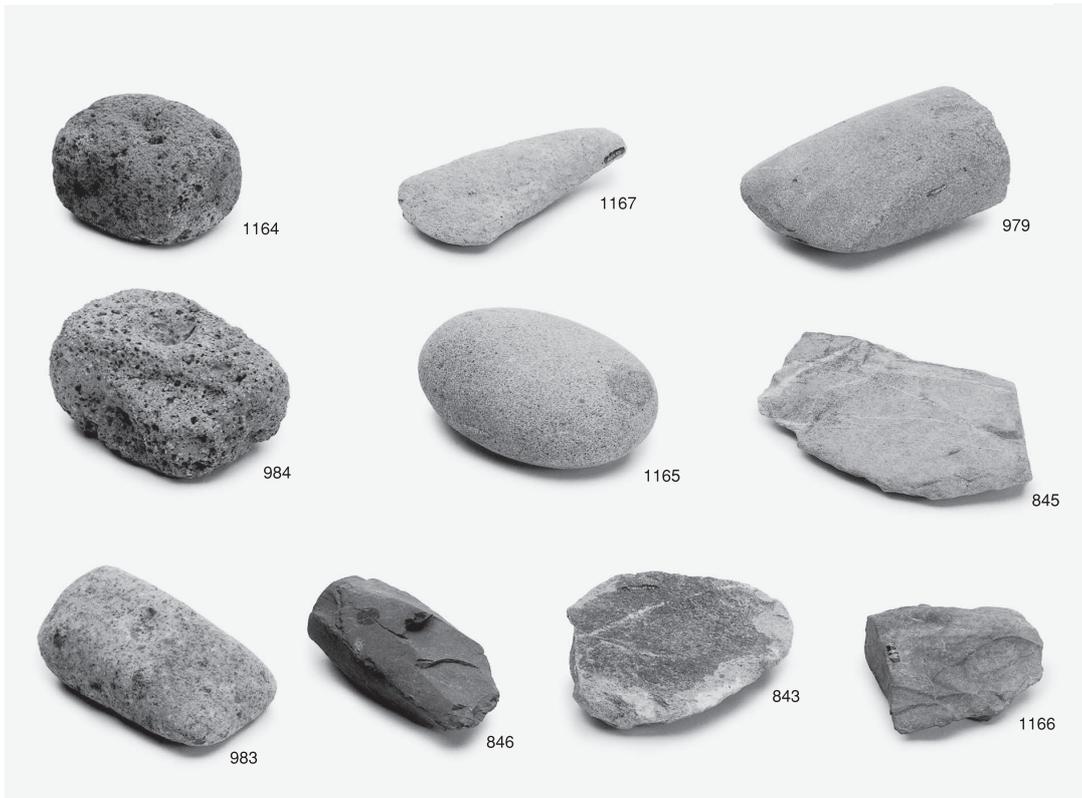


縄文時代の石器（4）

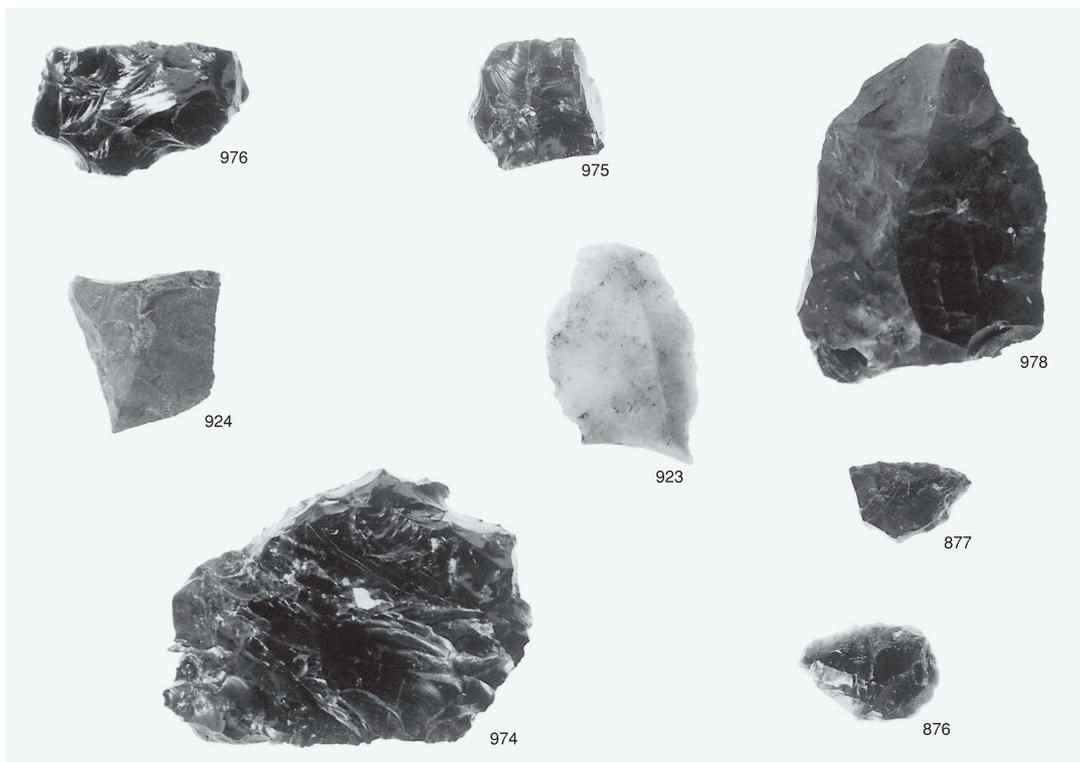
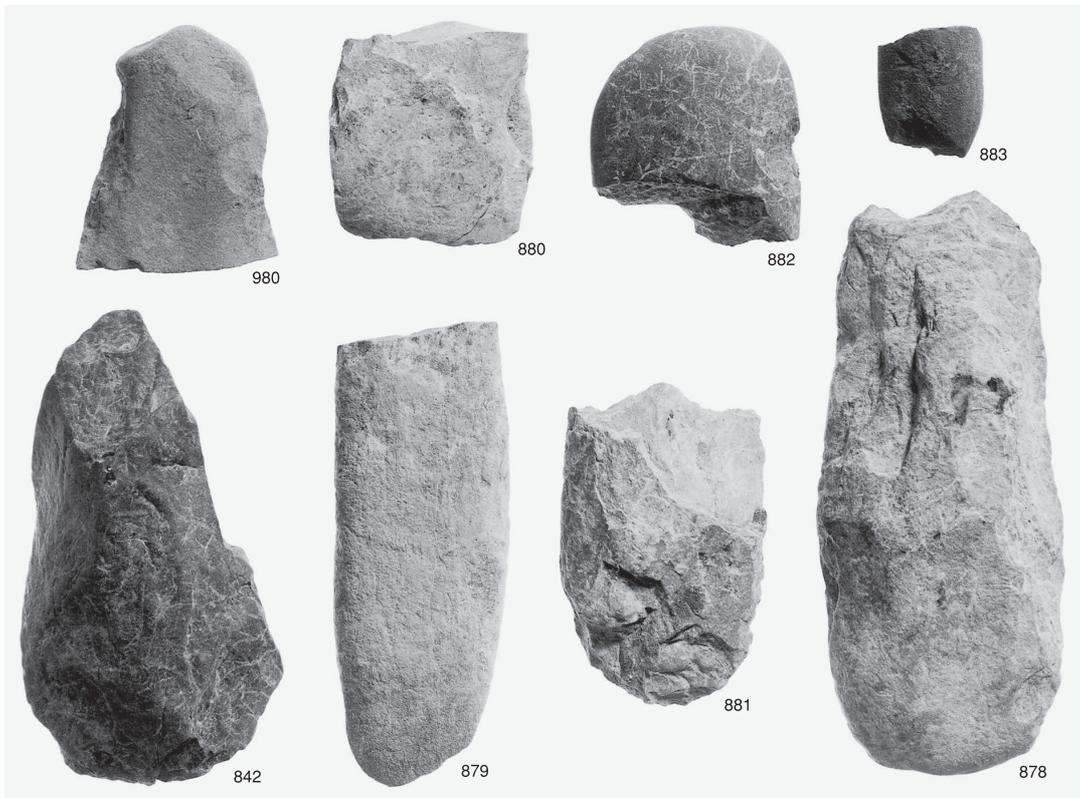


縄文時代の石器（5）

図版84

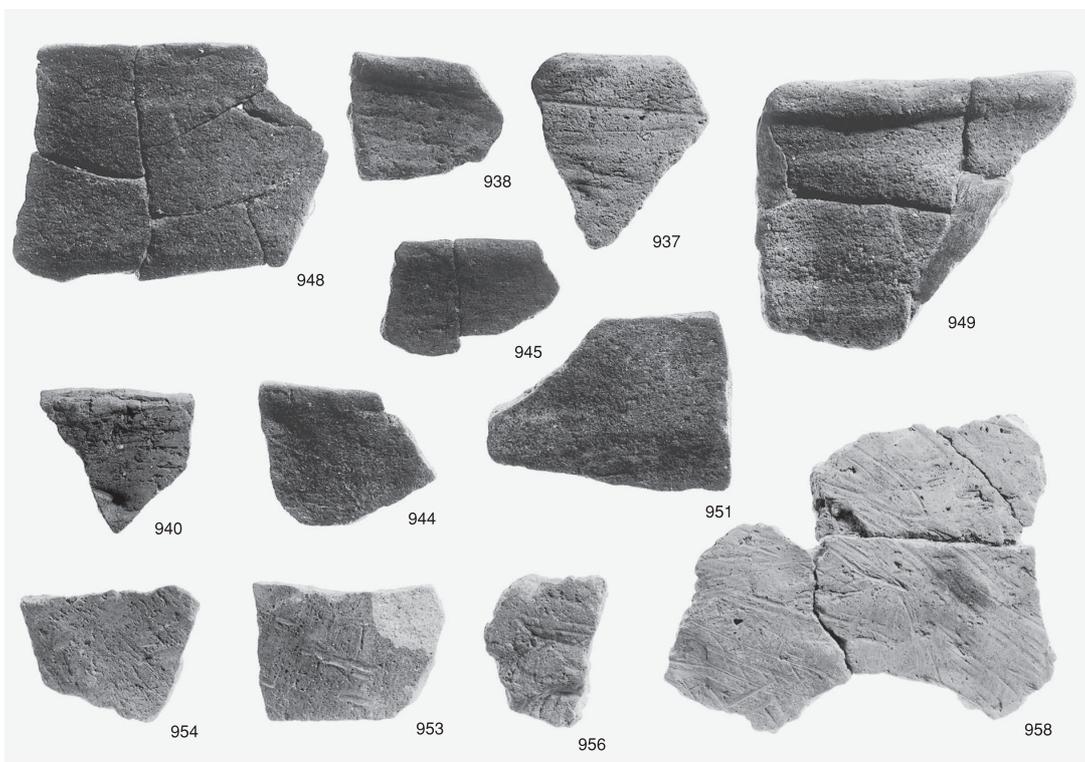
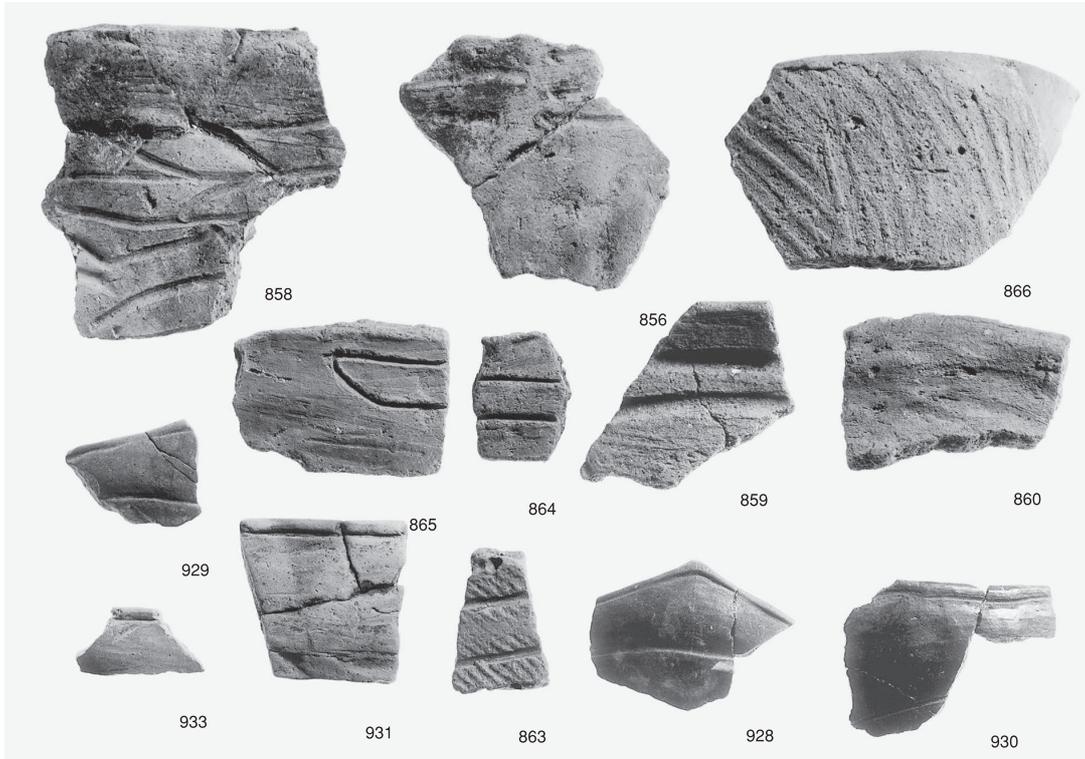


縄文時代の石器（6）

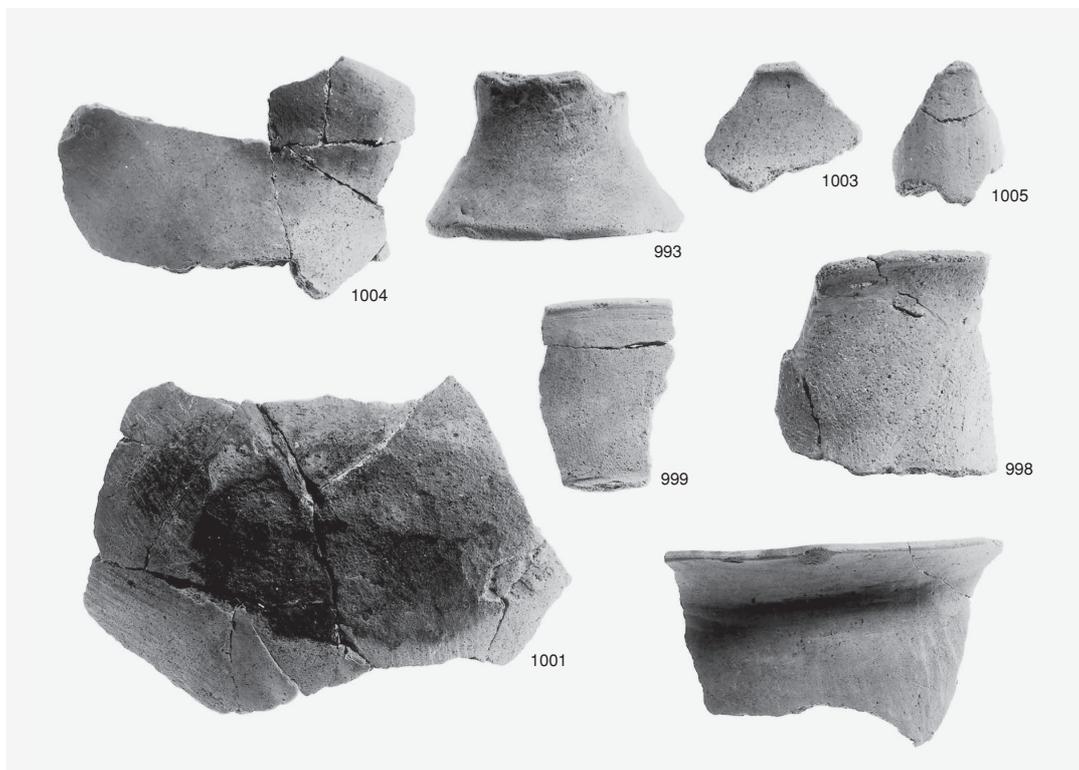


縄文時代の石器（7）

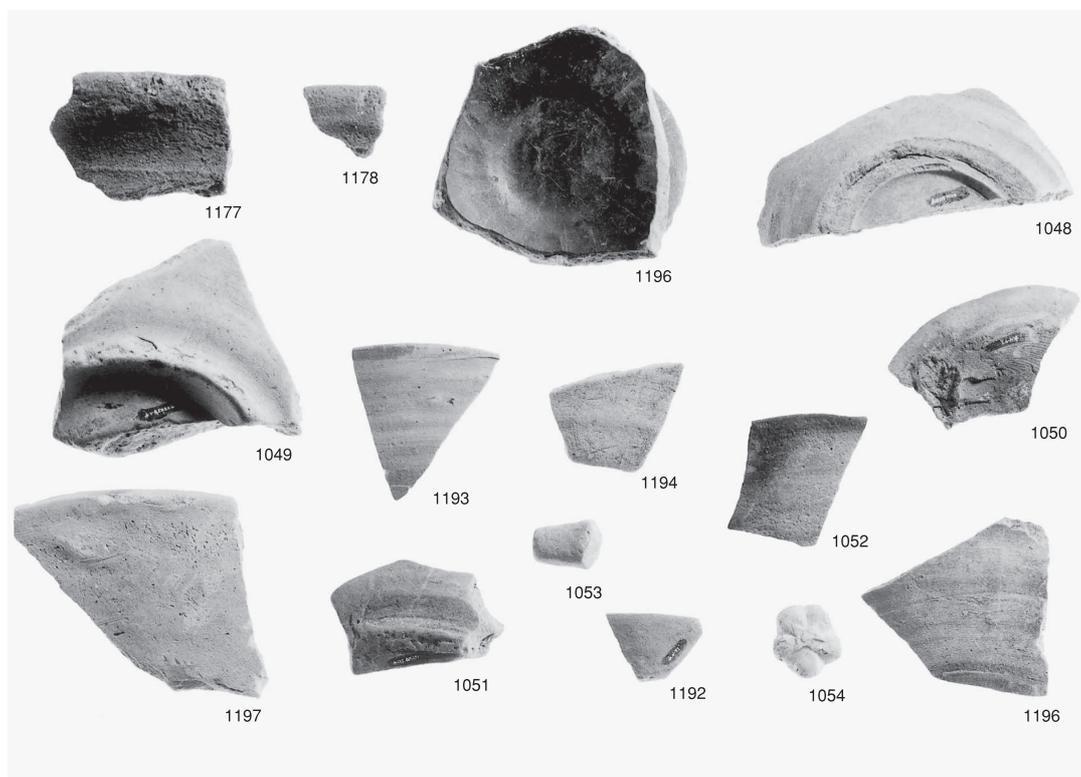
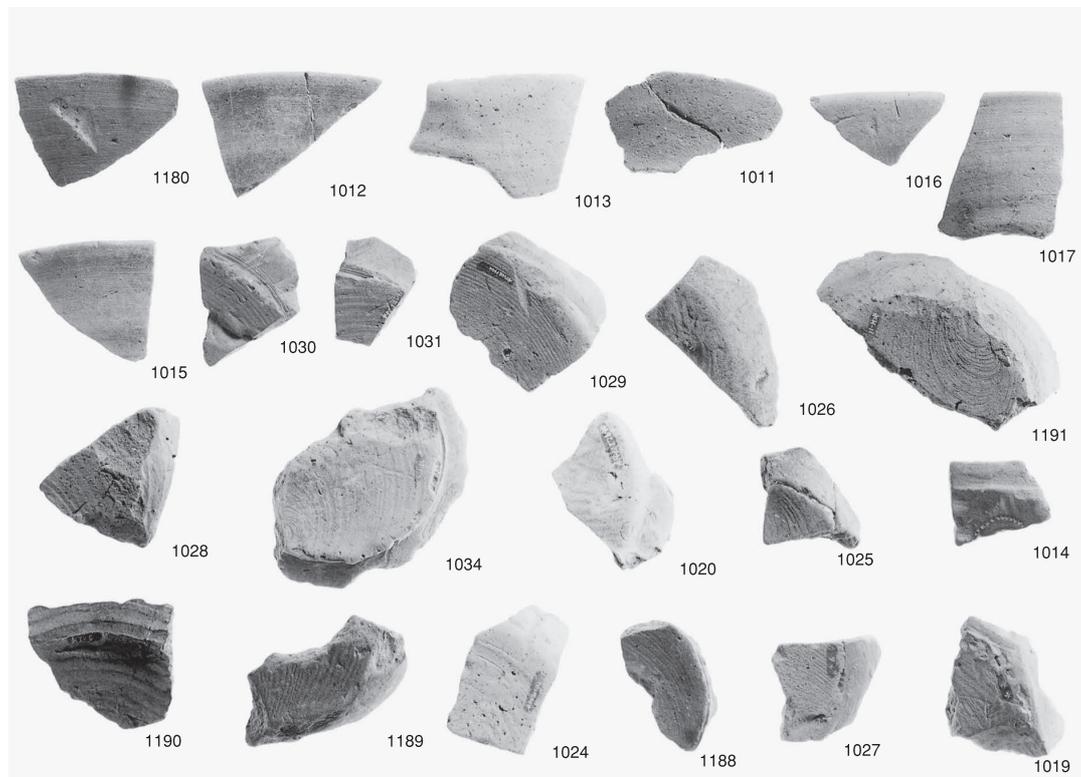
図版86



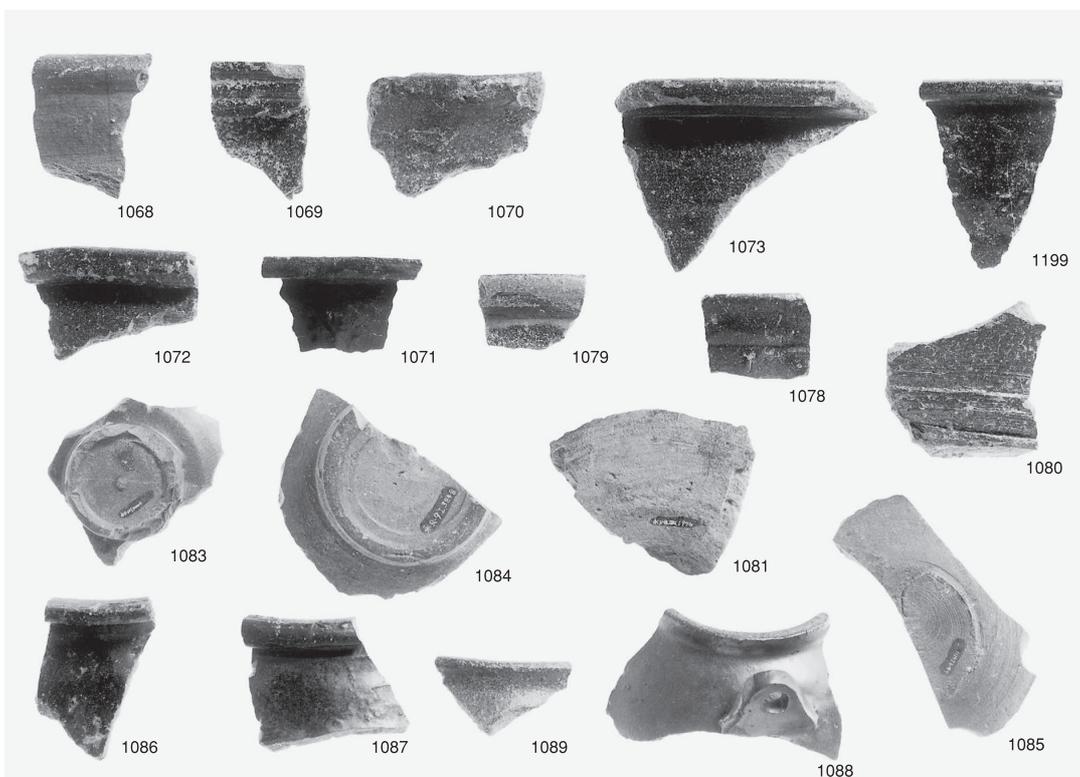
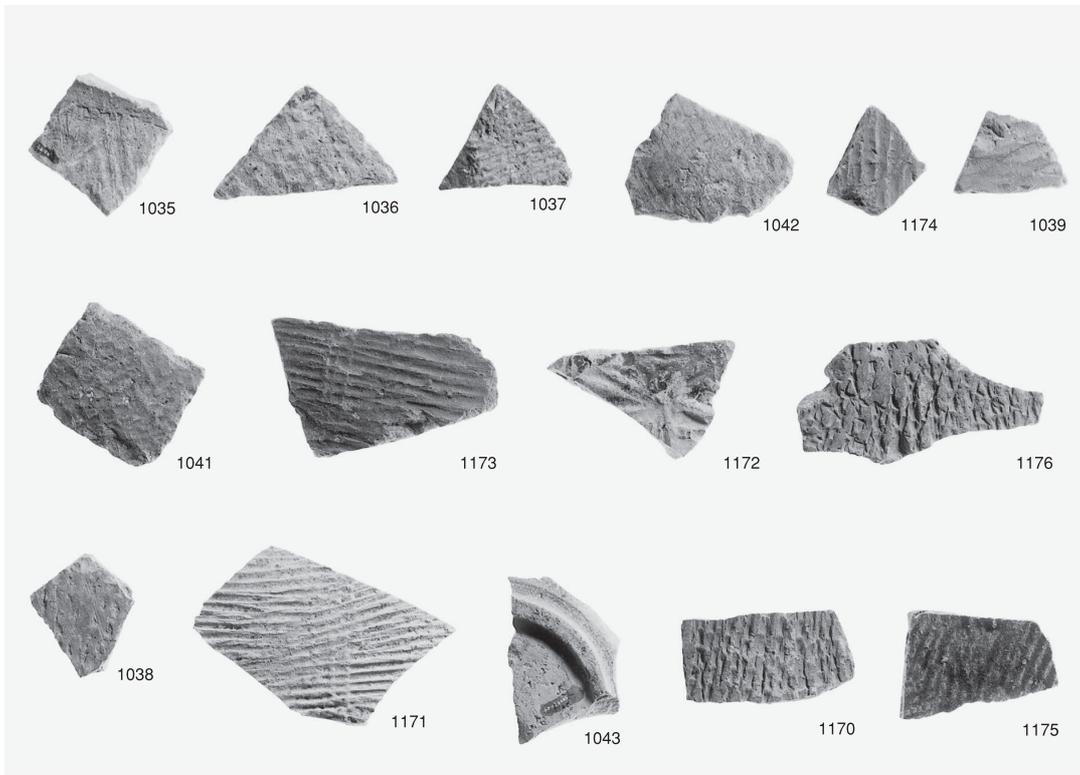
Ⅷ～Ⅹ・ⅩⅢ・ⅩⅣ～ⅩⅥ類土器



古墳時代・古代の土器

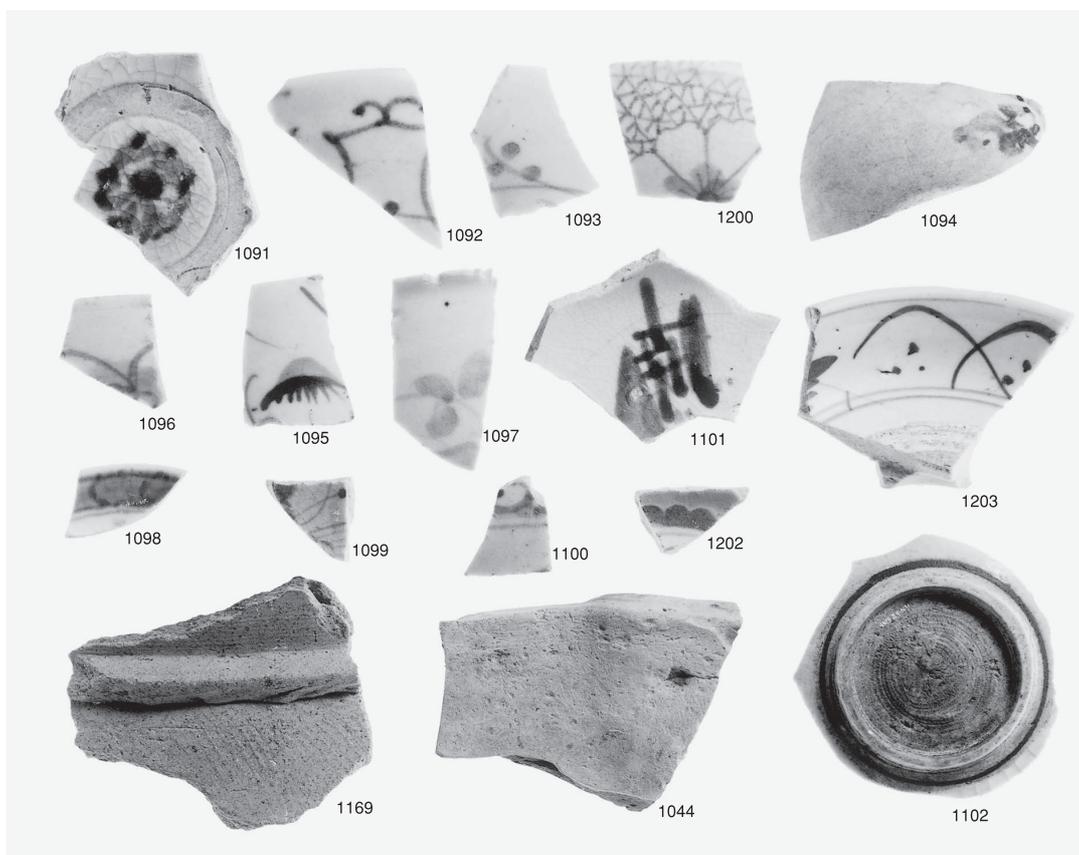
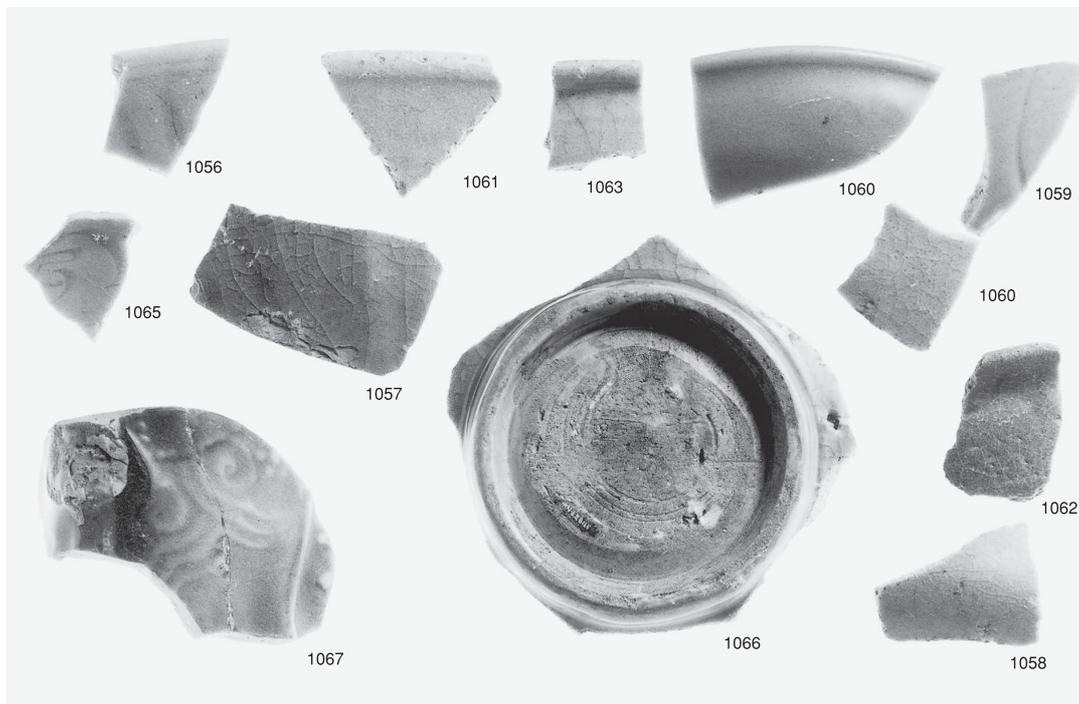


土師器

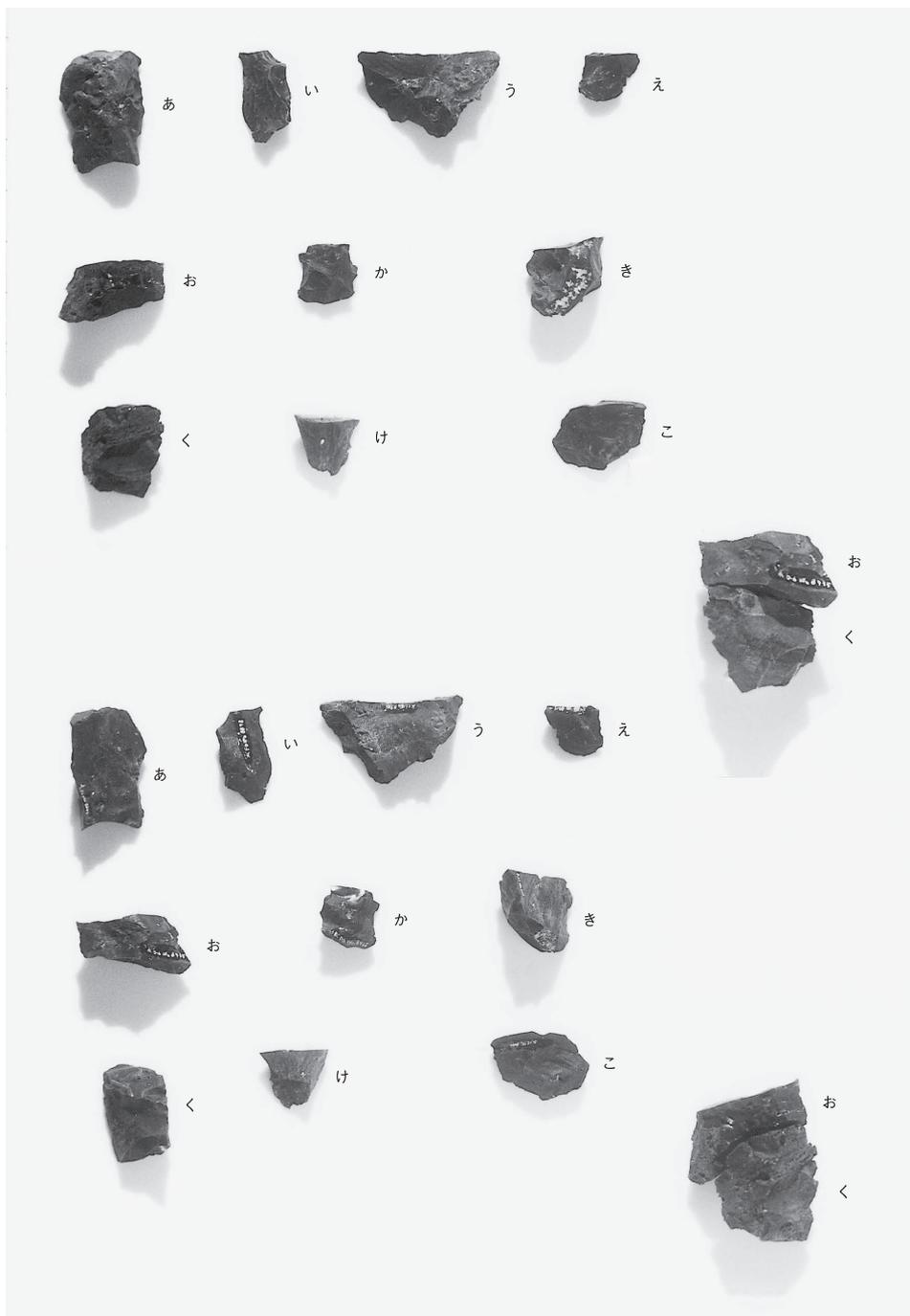


須惠器・陶器

图版90



青磁・染付



接合資料 (1)

図版91



接合資料(2)

あ と が き

南九州西回り自動車道建設に伴う遺跡の調査は平成2年度の分布調査に始まり、翌平成3年度の確認調査及び全面調査（現在の本調査）で本格的な発掘調査が開始され、以後は年次的・計画的に調査が行われて昨年度の柘城跡の調査終了で一区切りを迎えた。

この間、仁田尾遺跡や前原遺跡などマスコミからも注目された遺跡は数多かったが、この永迫平遺跡もマスコミに取り上げられ、注目された遺跡であった。ただ、その取り扱いについてオープンにできなかったことがほかの遺跡とは異なっていた。それは、とりもなおさず、上野原遺跡の影響であった。当時は、最古最大級の遺跡として国の史跡指定に向けて動きを加速していた時期であったため、上野原と同時期の遺跡の出現は何とも望まれないことであった。そのため、テレビ局や新聞社の記者達が取材に訪れても、「上野原とは比較にならない、一般的な遺跡である。」として対応していたことを、昨日のこのように鮮明に覚えている。

それでは、実際にはどうか。それは、本報告書を詳細に読んでいただければ明確となるはずである。この報告書は、事実以外何も加えてはいないし、逆に、何事も減らしてもいない。ありのままの「永迫平遺跡」そのものである。

足掛け2年にわたっての整理・報告書作成作業は、決して短いものではなかったものの、縄文時代早期の集落の様相を知る良好な資料を提供する遺跡の解明という点からは、やはり時間が足りなかったというのが本音である。竪穴住居跡は9軒、連穴土坑3基、集石でも12基といった主要な遺構と、メインがほぼ1時期という土器型式だけであればさほど苦しまずに済んだはずである。

しかし、実際には、一般の土坑が約400基、竪穴住居跡ほどの規模を持つ方形土坑と仮に呼称した大型の土坑も約100基検出されるなど、調査区域が約14,000㎡程度の遺跡としては、また、同時期とされる上野原遺跡や加栗山遺跡、同じ西回りの調査で発掘調査の行われた前原遺跡などと比較しても、面的な広がりという点からも、遺構や遺物といった内容的からも遜色のない遺跡であることから、時間不足を痛感させられた。もちろん、自らの力量不足によるものである。

縄文時代早期の集落跡と判明した第1地点がメインであったことは事実であるが、台地部から西に向かって少しだけ離れた第2地点の遺跡の様相は、また第1地点とは大きく異なったものであった。旧石器時代には2つのブロックが検出され、いろいろな石器も見つかり、また時期が少し新しくなっただけで地面に残された遺構が極端に減少するなど、集落の様相も人の動きもこれほどまでに変化するものか、と驚くほどのありようであったのだから。

永迫平遺跡の報告書刊行によろやくこぎつけた。現場での多くのできごと、四季を通して遺構・遺物と正面から立ち向かっていただいた作業員さん一人一人のこと、それらをひっくるめて1つの終焉を迎えたことを実感している。

西回り自動車道の路線となった部分は消滅した。しかし、遺跡自体は北と南に厳然と残っている。それを一縷の心の救いとして、精一杯取り組みはしたものの、それでもやはり「完全」なものではあり得ないという慚愧の念を振り払っていくことにしたい。（繁昌）

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（93）

南九州西回り自動車道建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅢ

永 迫 平 遺 跡

発行日 2005年3月

発 行 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-4461 鹿児島県国分市上之段1175番地1

TEL (0995) 48-5811

印刷所 濱島印刷株式会社

〒891-0122 鹿児島市南栄3丁目1番地

TEL (099) 268-6191